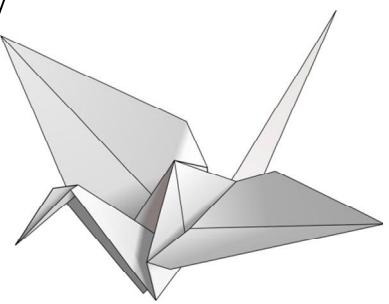


市民平和文集

VII



世界平和都市宣言

世界の恒久平和を実現することは、全人類共通の願いである。

しかるに、今なお核軍備の拡張は、依然として行われ、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

我々は、今こそ真の恒久平和達成のため、唯一の被爆国民として、全世界に核兵器の廃絶と軍縮を求め、戦争による惨禍を繰り返させてはならない。

この人類共通の大義に向かって不斷の努力を傾注することは、我々に課せられた責務である。

向日市は、長岡京遷都1200年にあたる本年、人類永遠の平和樹立の決意を表明し、ここに世界平和都市であることを宣言する。

昭和59年11月3日

向日市



はじめに

向日市は昭和59年、長岡京遷都1200年を契機に、世界の恒久平和を願い「世界平和都市宣言」を行いました。

以降、その崇高な理念を実現するために「向日市平和行動計画」を策定し、さまざまな平和施策に取り組んでまいりました。

とりわけ本年は、広島・長崎への原子爆弾投下と第二次世界大戦終結から80年という節目の年にあたります。

このため「被爆80年平和祈念事業」として、8月に開催した「平和と人権のつどい」では、広島の戦禍を乗り越えた被爆ピアノにまつわる映画上映や講演会、コンサートを開催するとともに、11月には被爆樹木の苗木を市民ふれあい広場に植樹いたしました。

また本市では昭和62年度より、市民の皆様からの公募により選出された代表を、広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式に派遣し、市内の園児や市民の皆様からお寄せいただいた折り鶴を、広島市の平和記念公園内にある「原爆の子の像」に献納しております。

私自身も、毎年8月6日には市民代表の皆様とともに広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式に出席しておりますが、本年は9日、長崎市で開催された平和祈念式典にも出席し、戦争の記憶や記録、そして歴史を決して風化させることなく、未来を担う世代へ正しく継承していかなければならぬという責務を、あらためて強く心に刻みました。

本文集は、令和5年度から令和7年度にかけて、広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式に市民代表として参加していただいた方々から寄せられた感想文をとりまとめたものです。

人類を滅亡へと導く恐ろしい核兵器が、再び使用されることがないよう、平和への祈りを捧げるとともに、この『市民平和文集VII』が、戦争の悲惨さや平和の尊さについて考えていただく契機となることを切に願っております。

令和7年11月

向日市長

もくじ

令和3年度及び令和4年度 新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い派遣未実施

令和5年度	1
平和への思い（子）	2
平和な世界の実現を祈って（父）	3
広島の原ばくと平和について（子）	4
広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式 （平和記念式典）に参加して（母）	5
令和6年度	6
未来を変える広島（子）	7
広島と平和と（母）	9
はじめての広島（子）	11
広島平和記念式典に参加して（母）	12
令和7年度	13
平和祈念式へ行って（子）	14
平和祈念式へ参加して（母）	15
広島平和記念式典に参加して（子）	16
被爆80周年に広島へ行って（父）	17
広島市平和宣言（令和3年度～令和7年度）	19

令和 5 年 度



平和への思い

江藤 実桜

私の祖祖母は戦争体験者です。以前、空襲で自宅が消失してしまった話、疎開先での生活や粗末な食事のこと、その他色々な話を聞かせてくれましたが、その時はとても悲しい気持ちになりました。私は以前から太平洋戦争について興味がありました。でも知るのが怖いという気持ちや、悲しい気持ちになりたくないという気持ちの方が大きく、私は目を背けていました。

今回、向日市の代表として平和祈念式に参列することが決まり、嬉しい気持ちと怖い気持ちがありました。伝達式で市長から 27,600 羽の折り鶴を受け取った時、怖さよりも、いよいよ行くんだという気持ちになりました。

1日目、平和記念資料館を訪れた時、あまりの凄惨な展示物に息をのみ、目を覆いたくなりました。悲しい気持ちにもなりました。しかし、向日市の代表としてここに来られたことや、多くの市民の思いが込められた折り鶴を奉納する責任感が私に勇気をくれました。

2日目、平和祈念式で午前 8 時 15 分黙祷をしました。あの場所にいた全員が、同じ思いでいたと思います。もう二度とあんな悲劇は起きてほしくないという思いです。

あれから 78 年が経ちました。私は毎日を平和に暮らしています。これは 78 年前、あの時代を生きていた人々のおかげです。私達は今の平和な暮らしを永遠に守っていかなくてはなりません。今を生きる私たちは歴史を学び、戦争の惨状を知り、それを伝えていかなくてはならないと思います。京都に帰ってきてから私は夏休みに歴史を学びました。戦争に関する映画を観て、たくさん本も読みました。これからも私は学ぶことを続け、その知識は平和のために使おうと心に決めました。



平和な世界の実現を祈って

江藤 秀俊

この度は親子共々貴重な体験をさせて頂き、誠に有難うございました。実際に被爆地を訪れ、原爆ドーム、平和記念資料館、平和祈念式に参加することで、被爆の実相に触れることができました。普段は中々考える機会の少ない、戦争や平和について、親子一緒に学ぶ又とない時間を頂戴しました。感謝の気持ちで一杯でございます。

一家で向日市に引っ越して参りまして約 2 年になりますが、このように貴重な機会を設けられていること、市が平和首長会議に参加されていることを知らず、非常にお恥ずかしい限りです。沢山の折り鶴を寄贈されている市民の方、安田市長をはじめ職員の方々の取り組みに頭が下がる思いです。

毎年テレビで拝見する広島平和記念式典の様子ですが、現地で参加させて頂くと、より厳かで、8月6日が特別な日であると実感致しました。広島に関わる多くの方々が平和への願いを後世へと繋いでいくために連綿と取り組みを続けられてきたことをうかがい知ることが出来ました。戦争を知らない世代として、日々何の不自由もなく過ごしておりますが、何気ない日常が貴重なものであること、有難いことであると痛感致しました。

平和記念式典でお話をされていた小学生代表 2 名の方の発表は、戦火で先祖を亡くされた思いも込められ、とても胸を打たれる内容でした。

式典の後には「こども平和の集い」に参加させて頂き、全国の学生の方々の平和への取り組み、被爆者である梶本さんの被爆体験を伺い、とても胸が熱くなりました。

ロシアによるウクライナ侵攻、核保有国の脅威等、世界では平和を脅かす為政者の動きが連日報道されていますが、何の罪もない市民の命が危険にさらされるようなことがあってはならないと、改めて実感しました。

平和な世界の実現のために自分自身何が出来るか、日々考えて過ごしていきたいと思っております。梶本さんが講演で仰っていた「一人一人が、自分の命を大事にして欲しい」という言葉を、まずは周囲の方に伝えていき、私自身も人の役に立てることを実践して参ります。

広島の原ばくと平和について

太田 葵

わたしは、市民代表として平和祈念式に参加しました。78年前に広島に原ばくが落とされた日が8月6日であり、それがどのようにであったのかを知るために行きました。

広島の平和記念公園や、平和記念資料館に行ったり、「ひろしま子ども平和の集い」に参加してわかったことがあります。原ばくが落ちた所は、広島市の病院でした。その近くには建物がたくさんありましたが、みんなこわれてしまいました。けれども、一つだけ残っていました。その建物は原ばくドームといわれ、今でも形は大体残っておりびっくりしました。原ばくはとてもい力が強くて、2.9キロメートルはなれている所でもひがいを受けました。すぐ近くにいた人は、あとかたもなくすがたを消されました。火がもえ、家や建物はくずれました。また原ばくは、とても熱く鉄がとけるほどです。人々は火で体や顔がもえて、お化けみたいなすがただたそうです。水がほしくても水はなく、とてもつらかっただろうなと思いました。原ばくが落ちた場所の近くには川があり、みんな必死に入りました。けれども、川でどんどん死んでいき、死体でいっぱいになったそうです。さらに、原ばくは病気になる光を出します。長い間ずっとです。親や子どもは、原ばくが落ちた後に家族をさがしに広島市に行きました。しかし1ヶ月後や1年後、数年後に病気になって死んでしまう人がたくさんいました。

平和記念資料館では、ひばくを受けた人の服がありました。全て茶色になっていてボロボロでした。ひばくを受けた写真も見ました。すごくこわくてなかなか見られず、心がいたかったです。すごくしょうげき的でした。それほど大変なことだったんだなと思いました。

わたしはこれらのことを使って、平和は大切だとあらためて思いました。戦争なんてなかったら、原ばくが落ちることもなかったはずです。市民は何も悪いことをしていないのに、ひがいにあったのです。たくさんの人々がいたくて苦しい思いをしました。まだ生きることができたのに、とてもかわいそうです。だから、戦争はぜったいにだめだと思いました。無せき任に人の命をうばうからです。

これからも平和で、みんな笑顔でいるような世界が続いてほしいです。そのためにわたしは、今回学んだことを友達やみんなに伝えて、平和の大切さを知ってもらいたいです。

広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式
(平和記念式典) に参加して

太田 彩子

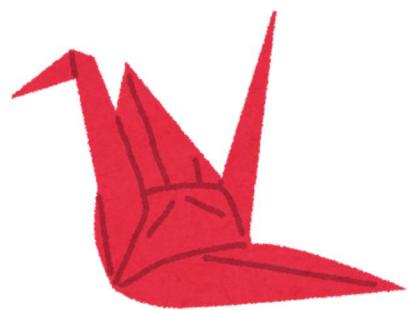
今回、平和記念式典に市民代表として参加させていただきました。子どもにとって貴重な経験になるであろうと家族で考えて、応募をしましたが、娘だけでなく親である私自身にとっても改めて平和を考える大変貴重な経験となりました。

私はこれまでに修学旅行や旅行で平和記念公園を訪れることがありました。子どもとともに式典に参加することで、より平和の重要性を実感し、今後の自分の考え方やあり方に影響する機会となりました。式典の中で挨拶をされた多くの方々が言葉についていた、現在の世界情勢の中での核兵器の有り方、「核兵器のない世界」を目指す重要性を改めて感じることとなりました。世界で今、ロシアがウクライナへの侵略に際し、核兵器による威嚇を続け、核兵器の使用という脅威で緊張が高まっています。それは78年前の過ちを再び世界で繰り返すことにつながりかねません。平和記念資料館でみたような恐ろしいことが二度と起こらないよう、今を生きる私達は、平和を願い、そのために自分が出来ることを日常生活の中で行っていかなくてはならないと考えます。そのためには、まずは「自分が知ること」の重要性を強く感じました。知らなければ動くこと、周りに伝えることもできません。一人一人の力は小さくとも、それがつながれば大きな動きとなりうると思います。

このような観点からも、今回の参加で各界の方々の平和に対する演説や誓いといった生の声を聴けたことは、私の心に深く刻まれました。特に、平和祈念式での子ども代表の平和への誓いや、「ひろしま子ども平和の集い」での梶本淑子さんによる被爆体験講話は心に深く残りました。今ある自分の当たり前のことを当たり前にできる幸せを今一度感じ、それを実現し続けるためには、命を大切にし、周りを想い、互いの笑顔のために自分の力を使うことの大切さを改めて感じました。

最後に、今回の参加は子どもと平和のためにできることについて対話し、考える機会となりました。互いの笑顔のために、自分の力を使う大切さを少しずつですが育んでいきたいと思います。この一歩の先に、自分も含めた人々の動きが繋がり、時代を超えて平和が続くことを願っています。

令和6年度



未来を変える広島

安東 いろは

「原爆って怖い」

そう感じた2日間。資料館でも祈念式でも言っていた、心に残った文章。「たった1つの爆弾で多くの命が奪われた。」広島に原爆が落とされたことは知っていた。でも、詳しい日にちや時間は知らず興味もなかった。でも、私の考えはこの2日間で大きく変わった。

広島に着いた時、路面電車がたくさん走っていて、賑やかな雰囲気で、ここに原爆が落とされたとはとても思えないような町並みだった。次に資料館。私の学校では原爆や平和について調べる宿題があり、資料館にはメモを持って行った。実際の写真がたくさんあった。町も町の人々も、目が開けられないほど悲惨なんだ。でもこの写真はごく一部で、もっとたくさんの被害が出ているなんて信じられない。しかも、原爆は落とされてからも放射能の影響がある。そこにいた人はどれだけ怖かっただろう。目に見えないものが身体に悪影響を及ぼしているなんて。信じられないことが目の前で起きているという恐ろしさを知った。原爆ドームも見た。骨組みだけでよく耐えられたなと思った。また後世に伝えるためにわざと残すという広島の強い思いも感じた。その後、原爆の子の像の元に千羽鶴を奉納しに行った。資料館や原爆ドームを見てからだと、像の印象ががらっと変わったように思えた。次の日。いよいよ平和祈念式だ。一番楽しみだったのは子ども代表の台詞。子どもの言葉が、どれだけの人の心に刺さるだろうと期待していた。実際、期待を超える言葉だった。ただ読むだけじゃない、心とともに声を出すような言葉。鳥肌が立った。どうか、この思いが核を持つ国へ届いて。その後、ひろしま子ども平和の集いへ。被爆者の方が詳しく語ってくれた。怒り悲しみ悔しさ。そんな思いを感じた。聞いている時にもし、自分も同じ状況だったらと想像してみた。でもどうしても頭の中が絵のようになって、実際とは程遠くなってしまう。そうじゃない。そうじゃなくて…。何回考へてもダメだった。でもわかったのが原爆の被害は想像を絶するほどだったんだということ。その後、同じことが起きないように取り組んでいる中学生の話を聞いた。英語を一から学んで、海外の人たちにも平和について英語で話しているという人だ。この人は自分ではない人のために努力しているなんて。私の学校でもこんな取り組みをしようと今、計画中だ。

私はこの2日間で広島の人はとても平和な心を持った人だと思った。路面電車に広島の人はほっとけない人とかかれていたり、道がわからないと声を

掛けてくれたり、原爆が落ちてから、過去より未来のことを考えたり、風鈴の音が平和を感じる音だったり。色々な人の言葉を聞いて思った。平和は人それぞれだ。自分が好きなことや場面が平和というものになる。ということは、今私は平和だ。



広島と平和と

安東 ちはる

この度、向日市の代表として、広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式に参列させて頂きました。このような事業があることは以前から知っていて、毎年応募していたのですが、「募集人数を大きく上回る応募がありました」というお知らせと共に、毎回落選の結果でした。今年も諦め半分で応募させて頂いたので、選ばれたとお知らせを受けた時は、本当に驚きました。

私の娘は、大変怖がりで繊細です。以前、神戸にある、阪神・淡路大震災の資料館へ見学に行った際、展示物や動画を見続けることができず、途中退席したことがありました。広島でも同じ結果になってしまったらどうしようと、大きな不安が、正直ありました。

でも、広島での娘は私の予想を大きく裏切りました。原爆資料館では、気になるデータやその時に感じた気持ちを細かくメモしながら、じっくりと見入っていました。私の方が目を背けたくなる展示物にもしっかりと向き合って、隅々まで吸収しようという熱意を感じました。動物好きの娘は、原爆による人への被害や影響だけではなく、動物へも着目していた事が印象的でした。原爆の様々な方面への被害や惨状を、娘を通して改めて気付かせてもらいました。

広島はとても暑かったです。気温が高いのは勿論そうなんですが、言葉に表せない特別な熱を持っていました。79年前のこの日、私が今立っているこの地で、現実に起こった酷い惨状や光景。今はきれいに整備されたこの地で、苦しんだ人が大勢いたということ。今、私の命があって、ここへ足を運べた事は決して当たり前ではない。そんな気持ちになり、とても緊張しました。

平和祈念式の中で、原爆投下時刻に合わせて1分間の黙祷をしましたが、私にはその1分間がとても短く感じられました。私に何ができるのかと考え始めると、とても1分では考えが纏まらず…。でも、原爆死没者慰靈碑の石棺に刻まれている言葉に、少しヒントを貰った気持ちになりました。そこには、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」と書かれています。この言葉を守って生きて行くこと。過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて、今を生きる。

また、私の最も好きな曲の中のひとつに、こんな歌詞があります。「日本がずっと平和なまま続していくとは限らない だから今この普通の日々を大切に生きる（中略）遠くで起きてる戦争はいつ終わるのかもわからない せめて僕らはずっと互いを許し合い生きよう（世界でいちばん好きな人・K A N）」

広島から戻ってから、この歌詞が胸に一層深く刺さります。

広島を訪れることができてよかったです。最後になりましたが、このような貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。

はじめての広島

森下 たくと

「向日市民代表で、折りづるを広島に届けに行くよ。」とお母さんから聞いた時は、とてもおどろきました。

8月5日の朝に向日町えきに集合して、広島に向かいました。久しぶりに新かん線にのって、広島えきについてからは、ろ面電車にものれて、はじめての広島でワクワクしました。

夕方に、安田市長がホテルに来てくれて、向日市のみんなが平和をねがつておった、たくさんのつるを持って、平和記ねん公園の中にある原ばくの子のぞうの所まで、歩いて行きました。安田市長からおりづるをうけ取りぞうにささげました。うけ取った時は、ドキドキしたけど、向日市代表として、しっかりとささげようと思いました。

8月6日は、いよいよ平和きねん式の日です。朝6時50分にホテルの1かいロビーに集合なので6時起きです。早起きだったけど顔をあらって、シャキッと目ざめることができました。ホテルから平和記ねん公園に向かう時から、けいさつの人や外国人の人たち、ぼくたちのように平和きねん式にさんかする人がたくさん歩いていました。今までテレビでしか見たことのない式でんにさんかするので、きんちょうしたけれど、しっかりと見て聞こうと思いました。

原ばくドームや平和記ねんしりょうかんも見学しました。広島の町が赤や黒色になり、人の顔や目やはなや口がわからないぐらい、黒くこげていたり、皮ふがただれていたりしているのを見て、こわくなって全ぶは見ることが出来ませんでした。

戦そうは、もうおきてほしくないと思いました。平和なせかいになるように、ぼくが見たことや学んだことを、ぼくより小さい人や戦うこと知らない人に教えようと思います。



広島平和記念式典に参加して

森下 紂里奈

年の離れた姉2人が小学生の頃から応募し続け、約10年…。長男が小学3年生になり、参加出来る学年になった年で、向日市代表に選ばれました。まだ、戦争や原爆のことは、正直よくわかっていない息子ですが、少しでも戦争の恐ろしさ、平和について学ぶ機会になって欲しいと思い、親子で参加させてもらおうと思いました。

式典の前日には、向日市民の方々が、平和への願いを込めて折られた折り鶴を、市民代表として、原爆の子の像に捧げました。安田市長から折り鶴を受け取る我が子の顔が、いつになく真剣な眼差しでした。このような大役を経験させて頂き、ありがとうございました。

翌早朝からホテルを出発し、平和記念公園に向かい、平和祈念式に参加させてもらいました。8時15分の黙とうの時間が近づくにつれて、今の生活と重ね合わせると、何とも言えぬ気持ちでした。息子が学童の登校班に向かい、母は、勤務先へと向かっている時間です。当たり前のように「いってきます」「いってらっしゃい」と言う言葉を最後に、一瞬にして何もかもが奪われてしまうことを考えると心苦しくてたまりませんでした。

原爆ドームや平和記念資料館も見学しましたが、当時の悲惨な姿を目の当たりにし、原爆の威力を思い知らされました。この日のこのことを風化させてはならない、伝え続ける大切さ、戦争のない平和な世界でなければならぬと強く思いました。

親子でとても貴重で有意義な2日間を過ごさせて頂いたことに、大変感謝しております。

令
和
7
年
度



平和祈念式へ行って

廣田 莉紗

私は、8月5日と6日に広島へ行きました。まず、はじめに向日市民の方々が折ってくれたおりづるを原爆の子の像にささげました。5日はとても暑くて大変だったけれど、無事に一つの役目を終えてほっとしました。5日には、平和記念資料館にも行きました。80年前、広島の町では原爆が落ち、たった1つの原子爆弾でたくさん的人が死んでいったと思うと胸が痛くなりました。原爆で亡くなった人もいれば、後から放射線などによる後遺症で亡くなった人もいると知って原子爆弾のい力は半ばないなと思いました。

6日には、平和祈念式へ出席しました。

朝早くだったのでねむたかったけれど式典の話はしっかりと聞けたのでよかったです。式典には日本人だけでなく世界各国の人々が来ていて人がいっぱいでした。テレビの人たちもいっぱいいてテレビ中継を全国で放送していてみんなテレビをつけて見てていたのかなと思うと、よりこの式典がどれだけ大切なのかよく分かりました。

この式典に参加できて、よりいっそどれだけ平和が大切なのかがよく分かりました。

最近、戦争をしている国が増えてきて爆弾を落としたりしているのは本当にダメだと思うし、1つの爆弾でたくさん的人が亡くなってしまうので戦争はほんとうにいやなことだなとよりいっそ思いました。



平和祈念式へ参加して

廣田 純子

今回、向日市民代表として広島平和祈念式へ娘と参加させて頂きました。娘にも戦争と平和について学んで欲しい願いから応募し、今回 3 回目にしての当選でした。又、今回は戦後 80 年となる節目の年でその様な年に参加出来た事に感謝いたします。

祈念式へ出席する前日に、平和資料館へ行きました。自分の子どもも同じ年の子ども達の写真や衣類・手紙。熱でぐにやぐにやになった鉄やびん。一発の原子爆弾の威力の強さ、破壊力、とても恐ろしく感じました。今、世界情勢が緊迫している中、核保有国が使用するかもしれない今、使用・保有を強く反対しなければならないと思いました。資料館に訪れる多くの外国人の方にも共感してもらいたいです。

次に市内の保育園児たちが折った鶴を市長と共に原爆の子の像に捧げに行きました。

全国から平和の願いを込めた鶴がたくさん、届いていました。

翌日早朝から平和公園へ向かい祈念式へ出席しました。75,000 人の人が出席され全世界の関心事である事だと思いました。

一人の力は小さくても、多くの人が集まればきっと大きな事もできるでしょう。核の恐ろしさをみんなにも知ってもらいたい。誰一人として悲しい思いをして欲しくない。戦争では笑顔は作れない。世界中に笑顔の花を咲かせられる世の中にしたいと強く思った 2 日間でした。決して風化させてはいけない。戦争を知らない私たちでも、子ども達に伝える事はできるはず。その使命を頂いたと思い、改めて今回の広島訪問に参加できた事に感謝いたします。

広島平和記念式典に参加して

西尾 美咲

私は、向日市の代表として平和記念式典に参加しました。原爆についてあまり知らなかつたので、この機会に色々知つておこうと思い、事前に父と図書館で本を借りて読みました。

8月5日の朝、少しドキドキしながら広島へ向かいました。まず、平和記念資料館に行き、原爆投下前後の写真や映像を見ました。やけどでただれた体や、自転車が焼け溶けて曲がってしまっている写真など、目をふさぎたくなるような光景ばかりで恐ろしくなりました。原爆投下直前まで普通に幸せに暮らしていたのに、8時15分、原爆の熱風と爆風によって一瞬のうちに多くの命がうばわれてしまったのです。

私が一番しようげきを受けたのは、「死のはん点」です。原爆による放射線を浴びたあと、体に紫色のはん点が出ると、2、3日後には必ず死にいたってしまうそうです。もし、自分や家族にそのはん点が出たら…死んでいくのを待つだけでどうすることもできないなんてどれだけ辛いことだろうと思いました。

その後、安田市長さんと一緒に、千羽鶴を「原爆の子の像」にささげに行きました。この千羽鶴は、平和な世の中になることを祈って保育園の子供たちが折ってくれたものです。毎年みんなが折ってくれていることを知り、私も今後、何か平和につながることをしたいなと思いました。他にもたくさんの人人が次々と千羽鶴をささげにきていたので、みんなの願いが届くよう祈りました。

次の日、平和記念式典に参加しました。すごく暑かったけど、朝早くからたくさん的人が集まっていました。入場する時に持ち物検査があつたり、持参したペットボトルのお茶を確認のために一口飲まされたり、厳重な雰囲気でした。

式典では、6年生の子が前に立って、「平和の誓い」を述べていました。同い年とは思えないほどしっかりと平和について考えていたし、文章も暗記していたので感心しました。テレビで見るのではなく実際に式典に出席し、雰囲気を肌で感じられたことが、私にとってとても貴重な体験となりました。

今回広島に行けたことで、原爆の恐ろしさや平和の大切さを改めて考えることができました。何不自由なく平和に暮らしていることを当たり前だと思わず、広島での経験を忘れず過ごしていきたいと思います。

被爆 80 周年に広島へ行って

西尾 信哉

私は、娘に原爆や戦争の悲惨さについて知ってほしいと思い、毎年応募させていただいておりました。念願叶い、この度平和記念式典に親子で参列する機会をえていただき、大変感謝しております。

私自身も原爆についてより詳しく知りたいと思い、早速娘と一緒に図書館へ行きました。「はだしのゲン」や「絵で読む広島の原爆」などの本を読み知識を深め、当日を迎えました。

8月5日、平和記念資料館を訪問させていただきました。被爆して亡くなつた人たちが着ていたボロボロの衣服、石段に残った人の影、被爆によって背中にできた大きなケロイドの写真を見て、改めて原爆の恐ろしさを痛感しました。人間が生み出した技術は使い方を誤るとこれほどまで多くの人命を奪い、一瞬にして人々の平和な日常を奪ってしまうということを目の当たりにしました。

資料館には多くの外国人入館者がおられ、外国の方も原爆について関心があることに驚きを感じつつ嬉しさもありました。ただ日本人に同情してもらうのではなく、被爆の実相を知ってもらい、核兵器による抑止では世界は決して平和、安全にはならないということを感じてほしいと思いました。

翌日、早朝より平和記念式典へ参列しました。警察官がたくさんいる中、セキュリティチェックを二度受けての入場に、会場には緊張感が漂っていました。

広島市長が平和宣言で話された

「たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみることが大事である。」

とのメッセージを聞き、対話と傾聴の大切さを再認識いたしました。

8時15分に黙とうをしましたが、久々に黙とうをしたように思いました。平和な日本に慣れてしまい、ほんの80年前に戦争が起こったという事実を我々は忘れつつあるのだと思います。

年々、被爆者の方々が少なくなっていますが、次の世代にも被爆の実相と核兵器がもたらした悲惨さを継承していかなければなりません。核兵器使用の真実を伝え、戦争によって命を落とすことが絶対にない世界を作ることが、私たちの使命だと実感しました。

〈市民の皆さんや、保育所の子どもたちから寄せられた平和の折り鶴〉

令和3年・・・36,227羽
令和4年・・・34,435羽
令和5年・・・27,543羽
令和6年・・・5,366羽
令和7年・・・6,265羽

ご提供ありがとうございました。



— 向日市は平和首長会議に加盟しています —

平和首長会議は、「核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画」を提唱し、広島・長崎両市長から世界各国の市長宛てにこの計画への賛同を求めたことから始まり、今や世界 166 か国・地域 8,516 の都市から賛同を得ている世界的なネットワークです。

広島市平和宣言

（令和3～令和7年度）

平和宣言（令和3年度）

76年前の今日、我が故郷は、一発の原爆によって一瞬で焦土と化し、罪のない多くの人々に惨(むご)たらしい死をもたらしただけでなく、辛うじて生き延びた人々も、放射線障害や健康不安、さらには生活苦など、その生涯に渡って心身に深い傷を残しました。被爆後に女の子を生んだ被爆者は、「原爆の恐ろしさが分かってくると、その影響を思い、我が身よりも子どもへの思いがいっぱい、悩み、心の苦しみへと変わっていく。娘の将来のことを考えると、一層苦しみが増し、夜も眠れない日が続いた。」と語ります。

「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」、これは思い出したくもない辛く悲惨な体験をした被爆者が、放射線を浴びた自身の身体(からだ)の今後や子どもの将来のことを考えざるを得ず、不安や葛藤、苦悩から逃れられなくなった挙句に発した願いの言葉です。被爆者は、自らの体験を語り、核兵器の恐ろしさや非人道性を伝えるとともに、他人を思いやる気持ちを持って、平和への願いを発信してきました。こうした被爆者の願いや行動が、75年という歳月を経て、ついに国際社会を動かし、今年1月22日、核兵器禁止条約の発効という形で結実しました。これからは、各国為政者がこの条約を支持し、それに基づき、核の脅威のない持続可能な社会の実現を目指すべきではないでしょうか。

今、新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、人類への脅威となっており、世界各国は、それを早期に終息させる方向で一致し、対策を講じています。その世界各国が、戦争に勝利するために開発され、人類に凄惨(せいさん)な結末をもたらす脅威となってしまった核兵器を、一致協力して廃絶できないはずはありません。持続可能な社会の実現のためには、人々を無差別に殺害する核兵器との共存はあり得ず、完全なる撤廃に向けて人類の英知を結集する必要があります。

核兵器廃絶の道のりは決して平坦ではありませんが、被爆者の願いを引き継いだ若者が行動し始めていることは未来に向けた希望の光です。あの日、地獄を見たと語る被爆者は、「たとえ小さなことからでも、一人一人が平和のためにできることを行い、かけがえのない平和を守り続けてもらいたい。」と、未来を担う若者に願いを託します。これからの方々にお願いしたいことは、身の回りの大切な人が豊かで健やかな人生を送るためには、核兵器はあってはならないという信念を持ち、それをしっかりと発信し続けることです。

若いを中心とするこうした行動は、必ずや各国の為政者に核抑止政策の転換を決意させるための原動力になることを忘れてはいけません。被爆から3年後の広島を訪れ、復興を目指す市民を勇気づけたヘレン・ケラーさんは、「一人でできることは多くないが、皆一緒にやれば多くのことを成し遂げられる。」という言葉で、個々の力の結集が、世界を動かす原動力となり得ることを示しています。為政者を選ぶ側の市民社会に平和を享受するための共通の価値観が生まれ、人間の暴力性を象徴する核兵器はいらないという声が市民社会の総意となれば、核のない世界に向けての歩みは確実なものになっていきます。被爆地広島は、引き続き、被爆の実相を「守り」、国境を越えて「広め」、次世代に「伝える」ための活動を不断に行い、世界の165か国・地域の8,000を超える平和首長会議の加盟都市と共に、世界中で平和への思いを共有するための文化、「平和文化」を振興し、為政者の政策転換を促す環境づくりを進めていきます。

核軍縮議論の停滞により、核兵器を巡る世界情勢が混迷の様相を呈する中で、各国の為政者に強く求めたいことがあります。それは、他国を脅すのではなく思いやり、長期的な友好関係を作り上げることが、自国の利益につながるという人類の経験を理解し、核により相手を威嚇し、自分を守る発想から、対話を通じた信頼関係をもとに安全を保障し合う発想へと転換するということです。そのためにも、被爆地を訪れ、被爆の実相を深く理解していただいた上で、核兵器不拡散条約に義務づけられた核軍縮を誠実に履行するとともに、核兵器禁止条約を有効に機能させるための議論に加わっていただきたい。

日本政府には、被爆者の思いを誠実に受け止めて、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となるとともに、これから開催される第1回締約国会議に参加し、各国の信頼回復と核兵器に頼らない安全保障への道筋を描ける環境を生み出すなど、核保有国と非核保有国の橋渡し役をしっかりと果たしていただきたい。また、平均年齢が84歳近くとなった被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、黒い雨体験者を早急に救済するとともに、被爆者支援策の更なる充実を強く求めます。

本日、被爆76周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御靈に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と手を取り合い、共に力を尽くすことを誓います。

令和3年(2021年)8月6日

広島市長 松井一實

平和宣言（令和4年度）

母は私の憧れで、優しく大切に育ててくれました。そう語る、当時、16歳の女性は、母の心尽くしのお弁当を持って家を出たあの日の朝が、最後の別れになるとは、思いもしませんでした。77年前の夏、何の前触れもなく、人類に向けて初めての核兵器が投下され、炸裂したのがあの日の朝です。広島駅付近にいた女性は、凄まじい光と共にドーンという爆風に背中から吹き飛ばされ意識を失いました。意識が戻り、まだ火がくすぶる市内を母を捜してさまよい歩く中で目にしたのは、真っ黒に焦げたおびただしい数の遺体。その中には、立ったままで牛の首にしがみついて黒焦げになった遺体や、潮の満ち引きでぶかぶか移動しながら浮いている遺体もあり、あの日の朝に日常が一変した光景を地獄絵図だったと振り返ります。

ロシアによるウクライナ侵攻では、国民の生命と財産を守る為政者が国民を戦争の道具として使い、他国の罪のない市民の命や日常を奪っています。そして、世界中で、核兵器による抑止力なくして平和は維持できないという考えが勢いを増しています。これらは、これまでの戦争体験から、核兵器のない平和な世界の実現を目指すこととした人類の決意に背くことではないでしょうか。武力によらずに平和を維持する理想を追求することを放棄し、現状やむなしとすることは、人類の存続を危うくすることにほかなりません。過ちをこれ以上繰り返してはなりません。とりわけ、為政者に核のボタンを預けるということは、1945年8月6日の地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻も早く全ての核のボタンを無用のものにしなくてはなりません。

また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、『戦争と平和』で知られるロシアの文豪トルストイが残した「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」という言葉をかみ締めるべきです。

今年初めに、核兵器保有5か国は「核戦争に勝者はなく、決して戦ってはならない」「NPT（核兵器不拡散条約）の義務を果たしていく」という声明を発表しました。それにもかかわらず、それを着実に履行しようとしているばかりか、核兵器を使う可能性を示唆した国があります。なぜなのでしょうか。今、核保有国がとるべき行動は、核兵器のない世界を夢物語にすることなく、その実現に向け、国家間に信頼の橋を架け、一歩を踏み出すことであるはずです。核保有国の為政者は、こうした行動を決意するためにも、是非とも被爆地を訪れ、核兵器を使用した際の結果を直視すべきです。そして、国民の生命と財産を守るために、核兵器を無くすこと以外に根本的な解決策は見いだせないことを確信していただきたい。とりわけ、来年、ここ広島で開催されるG7サミットに出席する為政者には、このことを強く期待します。

広島は、被爆者の平和への願いを原点に、また、核兵器廃絶に生涯を捧げられた坪井直氏の「ネバーギブアップ」の精神を受け継ぎ、核兵器廃絶の道のりがどんなに険しいとしても、その実現を目指し続けます。

世界で8,200の平和都市のネットワークへと発展した平和首長会議は、今年、第10回総会を広島で開催します。総会では、市民一人一人が「幸せに暮らすためには、戦争や武力紛争がなく、また、生命を危険にさらす社会的な差別がないことが大切である」という思いを共有する市民社会の実現を目指します。その上で、平和を願う加盟都市との連携を強化し、あらゆる暴力を否定する「平和文化」を振興します。平和首長会議は、為政者が核抑止力に依存することなく、対話を通じた外交政策を目指すことを後押しします。

今年6月に開催された核兵器禁止条約の第1回締約国会議では、ロシアの侵攻がある中、核兵器の脅威を断固として拒否する宣言が行われました。また、核兵器に依存している国がオブザーバー参加する中で、核兵器禁止条約がNPTに貢献し、補完するものであることも強調されました。日本政府には、こうしたことを踏まえ、まずはNPT再検討会議での橋渡し役を果たすとともに、次の締約国会議に是非とも参加し、一刻も早く締約国となり、核兵器廃絶に向けた動きを後押しすることを強く求めます。

また、平均年齢が84歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆77周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御靈に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和4年（2022年）8月6日

広島市長 松井一實

平和宣言（令和5年度）

78年前の原爆投下の日を、まるで生き地獄のようだったと振り返る当時 8 歳の被爆者は、「核兵器を保持する国の指導者たちは、広島、長崎の地を訪ね、自らの目で、耳で、被爆の実相を知る努力をしていただきたい。あの日、熱線で灼やかれ、瞬時に失われた命、誰からも看取られず、やけどや放射能症で苦しみながら失われていった命。こうして失われた数え切れない多数の人々の命の重さを、この地で感じてもらいたい。」と訴えています。

本年5月のG7広島サミットで各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、こうした被爆者の願いが各国首脳の心に届いていることの証しになると思います。また、慰靈碑を参拝された各国首脳に私から直接お伝えした碑文に込められた思い、すなわち、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越えて、全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和を祈念する「ヒロシマの心」は、皆さん的心に深く刻まれているものと思います。こうした中、G7で初めて「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が独立の文書としてまとめられ、全ての者にとっての安全が損なわれない形での核兵器のない世界の実現が究極の目標であることが再確認されました。それとともに、各国は、核兵器が存在する限りにおいて、それを防衛目的に役立てるべきであるとの前提で安全保障政策をとっているとの考えが示されました。

しかし、核による威嚇を行う為政者がいるという現実を踏まえるならば、世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということを直視し、私たちを厳しい現実から理想へと導くための具体的な取組を早急に始める必要があるのではないか。市民社会においては、一人一人が、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」というメッセージに込められた人類愛や寛容の精神を共有するとともに、個人の尊厳や安全が損なわれない平和な世界の実現に向け、為政者に核抑止論から脱却を促すことがますます重要になっています。

かつて祖国インドの独立を達成するための活動において非暴力を貫いたガンジーは、「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」との言葉を残しています。また、国連総会では、平和に焦点を当てた国連文書として「平和の文化に関する行動計画」が採択されています。今、起こっている戦争を一刻も早く終結させるためには、世界中の為政者が、こうした言葉や行動計画を踏まえて行動するとともに、私たちもそれに呼応して立ち上がる必要があります。

そのため、例えば、私たちが日常生活の中で言葉や国籍、信条や性別を超えて感動を分かち合える音楽や美術、スポーツなどに接し、あるいは参加して「夢や希望がある」といった気持ちになれるような社会環境を整えることが重要となります。皆さん、こうした社会環境を整えるために、世界中に「平和文化」を根付かせる取組を広めていきましょう。そうすれば、市民の支持を必要とする為政者は、必ずや市民と共に平和な世界に向けて行動するようになると確信しています。

広島市は、世界166か国・地域の8,200を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民レベルでの交流を通して「平和文化」を世界中に広めます。そして、平和を願う私たちの総意が為政者の心に届き、武力によらず平和を維持する国際社会が実現する環境を作ることを目指しています。また、被爆者の平和への思いを世界中の若者に知ってもらい、国境を越えて広め、次世代に引き継げるようするために、被爆の実相に関する本市の取組をさらに拡充していきます。

各国の為政者には、G7広島サミットに訪れた各国首脳に続き、広島を訪れ、平和への思いを発信していただきたい。その上で、市民社会が求める理想の実現に向け、核による威嚇を直ちに停止し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けて一歩を踏み出すことを強く求めます。

日本政府には、被爆者を始めとする平和を願う国民の思いをしっかりと受け止め、核保有国と非核保有国との間で現に生じている分断を解消する橋渡し役を果たしていただきたい。そして、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となり、核兵器廃絶に向けた議論の共通基盤の形成に尽力するために、まずは本年11月に開催される第2回締約国会議にオブザーバー参加していただきたい。また、平均年齢が85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆78周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御靈に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和5年（2023年）8月6日

広島市長 松井一實

平和宣言（令和6年度）

皆さん、自國の安全保障のためには核戦力の強化が必要だという考え方をどう思われますか。また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか。ロシアによるウクライナ侵攻の長期化やイスラエル・パレスチナ情勢の悪化により、罪もない多くの人々の命や日常生活が奪われています。こうした世界情勢は、国家間の疑心暗鬼をますます深め、世論において、国際問題を解決するためには拒否すべき武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていないでしょうか。こうした状況の中で市民社会の安全・安心を保つことができますか。不可能ではないでしょうか。

平和記念資料館を通して望む原爆死没者慰靈碑、そこで祈りを捧げる人々の視線の先にある原爆ドーム、これらを南北の軸線上に配置したここ平和記念公園は、施行から今日で75年を迎える広島平和記念都市建設法を基に、広島市民を始めとする平和を願う多くの人々によって創られ、犠牲者を慰靈し、平和を思い、語り合い、誓い合う場となっています。

戦後、我が国が平和憲法をないがしろにし、軍備の増強に注力していたとしたら、現在の平和都市広島は実現していなかったのです。この地に立てば、平和を愛する世界中の人々の公正と信義を信頼し、再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという先人の決意を感じることができます。

また、こうした決意の下でヒロシマの心を発信し続けた被爆者がいました。「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」これは、全身焼けただれた母親のそばで、皮膚がむけて赤身が出ていた赤ん坊、内臓が破裂して地面に出ていた死体…生き地獄ながらの光景を目の当たりにした当時14歳の男性の平和への願いです。

1989年、民主化に向けた市民運動の高まりによって、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊しました。かつてゴルバチョフ元大統領は、「われわれには平和が必要であり、軍備競争を停止し、核の恐怖を止め、核兵器を根絶し、地域紛争の政治的解決を執拗に追求する」という決意を表明し、レーガン元大統領との対話をを行うことで共に冷戦を終結に導き、米ソ間の戦略兵器削減条約の締結を実現しました。このことは、為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できることを示しています。

皆さん、混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、こうした先人たちと同様に決意し、希望を胸に心を一つにして行動を起こしましょう。そうすれば、核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはずです。必ずできます。

争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで「信頼の輪」を育み、日常生活の中で実感できる「安心の輪」を、国境を越えて広めていくことです。そこで重要なのは、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し、共感し合うことです。こうした活動を通じて「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。特に次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと「友好の輪」を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、「希望の輪」を広げていただきたい。広島市は、世界166か国・地域の8,400を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和意識の醸成に一層取り組んでいきます。

昨年度、平和記念資料館には世界中から過去最多となる約198万人の人が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への关心、平和への意識が高まっていることの証しとも言えます。世界の為政者には、広島を訪れ、こうした市民社会の思いを共有していただきたい。そして、被爆の実相を深く理解し、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という平和への願いを受け止め、核兵器廃絶へのゆるぎない決意を、この地から発信していただきたい。

NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議が過去2回続けて最終文書を採択できなかったことは、各国の核兵器を巡る考え方には大きな隔たりがあるという厳しい現実を突き付けています。同条約を国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として重視する日本政府には、各国が立場を超えて建設的な対話を重ね、信頼関係を築くことができるよう強いリーダーシップを發揮していただきたい。さらに、核兵器のない世界の実現に向けた現実的な取組として、まずは来年3月に開催される核兵器禁止条約の第3回締約国会議にオブザーバー参加し、一刻も早く締約国となっていただきたい。また、平均年齢が85歳を超えて、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆79周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御靈に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、改めて被爆者の懸命な努力を受け止め、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。皆さん、希望を胸に、広島と共に明日の平和への一歩を踏み出しましょう。

令和6年(2024年)8月6日

広島市長 松井一貫

平和宣言（令和7年度）

今から80年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島の街で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を茶毬に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかつたことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、自身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためにには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話を聞いてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約9割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためにには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらし得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんに「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいないでしょうか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促しています。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにはかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねないNPT(核兵器不拡散条約)が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずです。是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。

また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御靈に心から哀悼の誠を捧げると

ともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和7年（2025年）8月6日

広島市長 松井一實

あとがき

この文集には、広島市原爆死没者慰靈式並びに平和祈念式へ市民代表として参加いただきました方々の感想文を収めさせていただきました。

なお、編集にあたり、一部文字を取り替えるなどしておりますが、皆様の意志を尊重し、できるだけ原文のまま掲載しております。

終わりになりましたが、ご協力いただいた方々に、心からお礼申し上げます。



市民平和文集VII

令和7年11月
発行/向日市

〒617-8665 向日市寺戸町中野20番地
TEL: (075) 874-1409 FAX: (075) 922-6587